

やくしかノート 2 遊動編

作 揚妻 直樹・揚妻 柳原 芳美

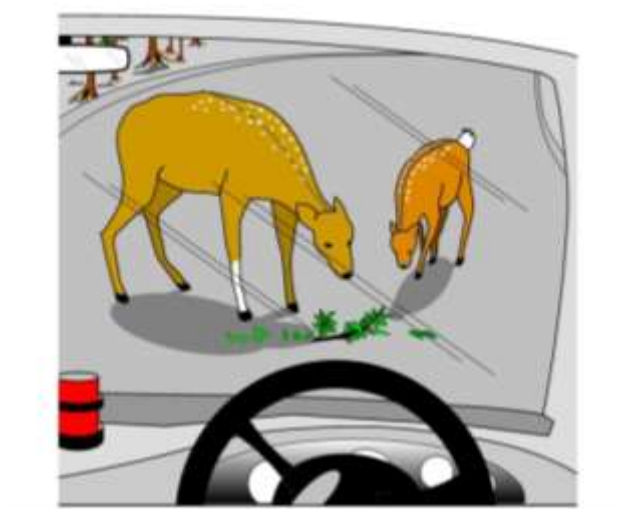
九月十五日(木) 午前 屋久島西部の道

私は仕事の打ち合わせのために車を北に走らせていた。夏休みが終わったこの時期、森に囲まれたこの道路の車通りはぐっと減ってくるものだった。それが最近では、それほどでもない。観光客が切れ目なく屋久島を訪れるようになったからだろう。この道は広いとはいえず、しかもクネクネ曲がっている。対向車も結構来るので、それなりの運転技術が要求される。ペーパードライバーの観光客がレンタカーでいきなりこの道を走るのはちよつと大変かもしれない。事実、異常にゆっくりにしか走れなかったり、右に寄って走ったり、だから対向車とすれ違えなかったり、すぐ後ろの退避所までバックできなかつたり・・・色んな困難に直面するようだ。離島の道を舐めてはいけない。

この道路には猿や鹿のほか、狸や野ねずみやこうもりなど、色々な動物が出てくる。ある時など二匹のいたちが大うなぎを奪い合っているが、くんずほぐれず道を横切ったこともあった。そういえば、なぜか猿は十五年くらい前から急に車を恐れなくなっている。以前なら、たとえ道でのんびり休んでいても、車の気配がすると奴らはパツと避けたものだ。しかし、今では車がぶつかるくらい近づいても全く逃げない奴もいる。そう思っていたら、数年前から今度は鹿も車や人を怖がらなくなってきた。車や人が頻繁に来るようになって馴れたのだろうか。でも、猿に遅れること十年というのは、

悲しいかな学習能力の差なのかもしれない。ともあれ、数年前からこの道では鹿をゆっくり見る機会が増えた。こちらが静かにしていれば結構長いこと観察できる。

今も五十メートル前方の路上に、親子の鹿がえさを探してプラプラ歩いている。車のスピードを落としながらこいつらに近づいて行つたが、何かおいしいものが路上に落ちていらく、どきたかない様子だ。私の前後に車も来ていないので、こいつらがどくのちよつとだけ待つことにした。



鹿はよく見ても一匹一匹を区別できそうもない。猿なんかは少しコツをつかめば顔とか体に個性があるので区別できると言う連中がいるが、鹿では難しいらしい。私なんか猿でも「大きい猿」「小さい猿」くらいしか判らないのに、鹿の区別がつくわけがなさそうだ。

親子の鹿はまだ何かを一心に食べながら、ほとんど私の車の方へと近寄ってくる。そばまで来たので、何にそんなに執着しているのか見てやろうと身を乗り出したとき、ふと母鹿の前足が目にとまった。右足のすねの半分くらいまで、毛の色が白いのである。これは白髪？じゃあ、こいつはバアサンなのか。と、今度は顔を見てみると、両目の周り、特にまぶたの上の毛も白くなっている。まさにアイシャドウを入れてる風である。ちよっと前に都会の女子高生の間では顔を黒く塗り、目の周りに白いシャドウ入れるヤマンバメイクが流行っていた。この年増（と断定！）の雌も地の茶色の顔に目の周りが白く、見ようによつてはヤマンバメイクに見える。屋久鹿でもヤマンバメイクが流行っているのだろうか？

十月二十六日（水） 昼ごろ 屋久島西部の道

あれ以来、鹿を見かけるたびに、ヤマンバメイクをしていないかチェックするようになってしまった。でもヤマンバメイクしてるのは、どうも一匹だけのようだ。ヤマンバを見るのはきまって最初に出会った場所のそばだし、いつも子連れだ。鹿でもよく見れば誰が誰だか判ることがあるようだ。そこで、この雌鹿を「ヤマンバ」と命名することにした。屋久島なので「山姫」にしようかとも思ったが、襲われたりしたら嫌なのでやめた。



今日もヤマンバは子供と一緒にいつもの場所でプラプラしている。道路から二十メートルほど森に入ったあたりで、二匹並んで落ち葉の中を探っている。こいつらに出会うのはこの周辺二百メートルというところだ。だとすると、かなり狭い範囲しか動き回っていないことになる。わざわざ私が通る時間に合わせて、遠くから会いに来ているわけでもないだろう。そういえば、ここいらに出てくる他の鹿たちも大体同じようなメンツのような気がする。もう一組の母子、雌鹿の二頭連れ、そして体の小さい雄一頭に大きな雄二頭、大体こんなもんだ。鹿は足はかなり達者なはずだが、ホントにそんなに動かないものなのだろうか。

十月三十日（日） 午前 自宅

久しぶりの休日。釣りにでも行こうと思っていたのだが、朝から雨がサーサー降っているのでやめにした。仕方がないので家でテレビを見ながらゴロゴロしていたが、それにも飽きてしまった。最近のテレビ番組はどうも面白くなかったように感じるのは私だけだろうか。そんな時、一度だけ行ったことがある「屋久島野外博物館・別館」をふと思いついた。本館もあるらしいが、どこにあるのか私の周りの人は誰も知らなかった。もつとも別館の存在もそんなに知られていないのだが、たまに「あー、あのボロイ小屋ね」とか言う人もいたので、こつちは少しは認知されているようだ。とりあえず昼飯を食べたら別館を訪ねて、屋久鹿のことを聞いてみることにしよう。

同日 午後 野外博物館・別館

ギーと別館の扉を軋ませながら中に入ると、前に来た時と同じように「当館の学芸員は不在です。本や資料はご自由に閲覧ください。」と張り紙がしてある。この職員はいつもサボっているんじゃないか？ぶつくさ言いながら、とにかく奥に入ってみる。暗い部屋全体は柔らかい雨音で満たされている。クモの巣が絡みついていて蛍光灯をつけて、周囲を見回した。博物館といっても別館だからか、展示品はなく、ただ結構な分量の書籍や報告書の類が本棚に納められている。その中から屋久鹿のことが書いてありそうな本をいろいろ物色してみたが、結局前に見つけた「永田栗生著 ヤクシカの全て の一部」という本が詳しくそうだ。

表 1. 低地林にすむヤクシカの季節ごとの遊動域面積 (ha)

	春	夏	秋	冬
メス	3~17	5~16	7~11	6~14
オス	9~29	18~26	14~18	9~49

ヤマンバを見ていて気になったのだが、屋久鹿は一体どのくらい動き回るものなのだろうか。一匹の動物が動き回る範囲をちゃんと調べるのはかなり大変なようだ。この手の調査には動物に発信機をつけて、それを手振りのアンテナを使って位置を探るという方法がよく用いられるらしい。鹿は昼夜を問わず活動するため、調査は夜中にもやらなくてはならないようだ。そういえば、うちの事務所で働いているおぼちゃん、深夜にあの道を通っていたら、男

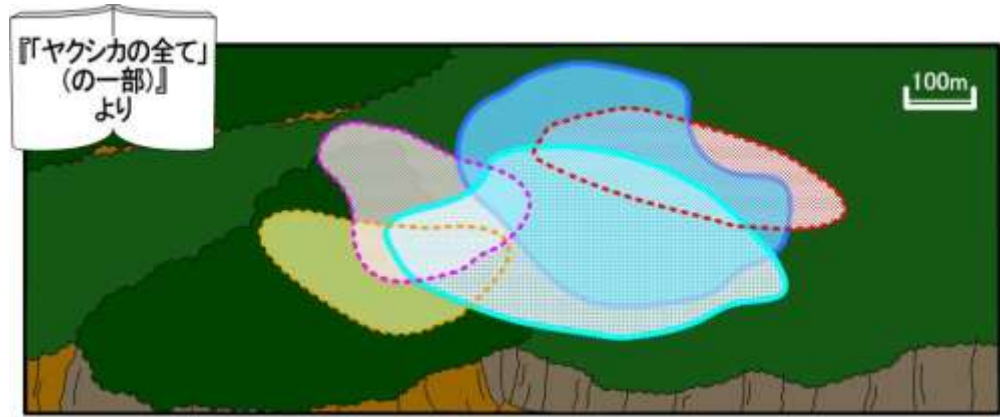
が道端で鉄の棒のようなものを振り回しているのを見た怖がっていたことがあった。その時は変な宗教儀式か、宇宙人と交信でもしているアブナイ人かと思っていたが、ひよっとすると動物の調査をしていたのかもしれない。

さて屋久鹿が動く範囲はどのくらいのものだろうか。この本によれば、「低地のヤクシカの遊動域はニホンジカの中では狭い方といえる。最外郭法を用いて算出した季節ごとの遊動域の広さはメスで数々十数ヘクタール、オスでは十々五十ヘクタールの場合が多い(表1)。ただし、遊動域面積は算出法によって大きく異なるので注意が必要である。」のだそうだ。その後にはグジャグジャと色んな面積算出法について書いてあるが、それは読み飛ばして・・・。「オス・メス間、オス・オス間、メス・メス間の遊動域は互いに何重にも重複しており、ナワバリは見られない(図1a)。遊動域が狭く、しかも重複が著しいのは屋久島の照葉樹林の生産性が高いことによるものと考えられる。ただし、森を切り開くなどして草地ができたりすると部分的に生産性が高まり、遊動域面積や遊動域の利用の仕方は変化すると思われる。」とある。

メスで十ヘクタールくらいということは、三百メートル四方の範囲でいたい収まってしまふわけだ。だとすると、ヤマンバをいつも同じ場所で見かけるのも合点がいく。でも、一生同じ場所に住み続けるのだろうか、引越したりしないのだろうか。読み進んでいくと、こんなことが書いてある。「メスの場合、季節や年によって遊動域はあまり変わらないようである。ただし、メスが通常の遊動域から一キロ以上離れた場所へ移動することがたまにある。しかし、その場合でも一泊以内でもとの場所に戻っていた(図1b)」。引越しはしないけど、遠足くらいはするようだ。

「オスには二つのタイプがあるようである。一つはメスと同じようにあまり動かないタイプ。もう一つは時々、遊動域を大きく変えるタイプである。こうした移動は突然で、それまでいた場所から一

日程度で一から七キロも離れた場所に移動する。一・三日のうちに元の場所に戻ることもあるが、移動後しばらくそこに定住することもある。ある個体は三年間のうちに数キロずつ離れた三カ所を



a 各個体の行動域 ○ オス ○ (点線) メス



b 遠足したメスの例



c 移動を繰り返したオスの例

図1 ヤクシカの遊動様式のイメージ図。a・各個体の遊動域はオスメスを問わず重複している。b・あるメスは一歳の子をつれて一・四キロメートル離れた場所に日帰り遠足していた。c・三つの遊動域を繰り返し行き来したオスの遊動様式。ここでは、ある一年間の移動のみを示している。春には最初、右側の遊動域を使っていた。その後一時、真ん中の遊動域に移動したが、また右側の遊動域に戻った。夏は右側の遊動域に留まったが、秋までに左の遊動域へ移動。秋の間に一度だけ、右の遊動域まで遠足に出かけた。そして、冬まで左の遊動域で過ごした。

繰り返して来た(図1c)。この個体の移動範囲は南北八キロ以上、東西二キロ以上に及んだ。本土ではニホンジカが遊動域を移すのは交尾期や積雪期に多いようだ。しかし、ヤクシカの場合、特に季節性はみられておらず、移動の理由は不明である。なお、高標高地のヤクシカの遊動についてはほとんど解っていない。風の向くまま、気の向くまま、鹿にもフーテンの寅さんみたいなのがいるようだ。

小腹もすいてきたのでそろそろ帰ることにした。今回もこの学芸員は戻って来ず、話を聞くことができなかった。閉館時間にはちゃんと鍵くらいかきにくるのだろうか、といぶかしく思いながら別館を後にした。雨はいつの間にかあがっていた。

同日 自宅に帰る道すがら

海沿いの道に車を走らせながら、あのヤマシカの事を考えてしまった。あいつはたった数百メートル四方の世界しか知らないのだ。しかも、会うメンツもほとんど同じで、たまに寅さんがやって来るくらいだ。私だったらそんな狭い空間と狭い人間関係だけで生活していたら息が詰まってしまう。でも・・・そういえば、昔は一つの集落からほとんど出ることもなく一生を終えた人もいたと聞いたことがある。案外、人もそんなものなのかもしれない。

ただし書き

このお話はフィクションです。ただし、主人公が体験したことや「ヤクシカの全て」の一部の記載は、筆者らが主に屋久島西部地区で行ってきたヤクシカの調査結果などを参考にしています。